

2026年

風光れ

人権のたより

通算第95号 9月 1日発行

三重県立津東高等学校

夏休みもおわり、二学期がスタートしました。まだまだ日差しも強く、暑い日々が続きます。熱中症には十分気をつけましょう。

○「因果」ではなく「いま、どうするか」 ～別の「猿」と信長の物語～

戦国武将の一人、織田信長はそのエピソードから冷徹なイメージが強いと思われます。しかし、信長の一代記、『信長公記』には、こんな意外な話が記されています。

美濃と近江の境、山中という地に、身体に障がいのある人物が道ばたで物乞いをしていました。人々はその人を「山中の猿」と呼んでいたといひます。

その姿を目にした信長は「あまりに気の毒だ」と感じながらも、「なぜこの者はここにいるのか」と周囲に尋ねます。土地の人々は、昔この地で常盤御前（源義経の母、没年不詳）が討たれ、その因果で代々このような者が生まれるのだ、と語りました。いわば迷信です。信長はその説明に納得して終わることはしませんでした。後日、木綿二十反を与え、町の人々に命じます。この布を換金し、その半分で小屋を建て、さらに毎年、麦や米を少しずつ分け与え、飢えないように支えよ、と。単なる一時の施しではなく、地域で見守り続ける形を整えたのです。



狩野元秀 「織田信長像」

「因果だから仕方がない」と考えれば、そこで思考は止まります。しかし信長は、過去の理由よりも「いま目の前にいる一人」に目を向けました。私たちのまわりにも、「本人の責任」「生まれつきだから」と片付けられてしまう出来事はないでしょうか。理由を語ることはできても、行動を起こすことは簡単ではありません。

過去や噂ではなく、いま何ができるのか。山中の猿の話は、その問いを現在の我々に投げかけているように思えます。

○声の大きさと沈黙のあいだで

社会の中では、「少数の立場の声に耳を傾けよう」という考えが広く語られます。それは、見えにくい困りごとや経験が、気づかれずに過ごされてきた歴史があるからです。

一方で、「サイレントマジョリティ（沈黙する多数）」という言葉が示すように、はっきり意見を表に出さない人たちの存在もまた現実です。声が小さいから関心がないとは限りません。その問題を深く考えながら言葉を選んでいる場合もあります。

また、「ノイジマイノリティ（声の大きい少数）」という表現が使われることもあります。しかし、実際には発信の機会や環境の違いで、目立っているだけかもしれません。

誰かの活動に賛同するかどうかは、一つの答えにまとめられるものではありません。ただ、重要なのは、声の大きさや多数・少数というラベルだけで単純に判断しない姿勢です。ある人の発信の背景にはどのような経験があるのか、逆に沈黙している人が何を感じているのかを想像することで、議論は対立ではなく理解へと少しずつ近づいていきます。